

出来事をよい経験として捉えるか、過去として割り切るか、それだけで自分への影響が大きく変わると私は考えます。私は8年前幼稚園の年長のとき東日本大震災を経験しました。その出来事をどう捉えたら正解か分らず、ずっと目をそらし続けてきました。当時私の住んでいた場所は福島県南相馬市、震度六の地震と津波、放射線の影響で人が住めない状態になってしまいました。避難生活は、「食べたいものを食べられない」「常に共同生活」「物を買えない」「携帯が使えない」「病院が無い」などとても過酷な生活でした。大人は子どもに言いました。「大丈夫だからね。」と。警報が鳴る中正直説得力はありませんでした。でも私達子どもが頼れるのはお母さんただ一人だったのです。地震が起きる1秒前までと違いすぎる現実、一瞬で変わってしまった世界に私は絶望しました。避難生活の後、県外に引っ越し家族以外の全ての交友関係を失いました。この出来事で私の友達はリセットされてしまいました。いつも一緒にいて、小学校も一緒のはずだった友達は、さよならも言えずに一瞬で全国に散らばりました。「また明日ね。」って言ったはずなのに。あれから8年が経ちました。きっともう会うことはないでしょう。友達を作り直すのはとても大変で、何度もセーブを行わずリセットされるゲームのように時間だけが過ぎていきました。できることなら消したい過去です。この出来事さえ無ければ、もっと違った人生を送っていたのかもしれないから。

でも中学生になって考えが変わってきたのです。学校の授業で「自然災害」について考える機会がありました。その時友人は言

っていました。「結局はなんとかなる。」「さすがに死ぬことはないでしょ。」「起きてみなきゃわかんない。」と。私にはその言葉がとても軽い考えに聞こえたのです。「起きてからでは遅いこと。」「人間が自然災害を敵にすれば簡単に命を落とすこと。」「しっかり、深く考えてほしい。」そう心から思ったのです。その時、「東日本大震災」が私の考えに大きく影響を与えていることによく気づいたのです。この出来事はいらない過去ではなく必要な経験だったのではないか。そこから学べること、生かせることを一つずつ考えていくことが大切なのです。過去を経験という言葉に置き換えることでその意味が大きく変わります。だから私はこの出来事を経験として受け入れ、そこから初めて見えた光でこの今を照らしていこうと思います。「放射線を受けた福島県民」その肩書きが未来のための経験へと変わりました。私はこの経験を人生の教訓の一つとして心の奥にしまいます。そしていつか役に立つ時が来れば引き出しから取り出そうと思います。私と同じようにどうしようもない出来事を経験した人に伝えたい。その経験は決して意味の無いものではない。そしてあなたの心がナイフに刺され続ける必要も無いということ。無理に割り切らなくてもいいのです。誰かが経験しなければ真実はわかりません。もし深い傷を負ってもその傷が癒えるときがきたら自分なりに、少しずつ前を向く、それだけでいい。その経験はきっと未来で光となり、心の闇に明るさをくれる。そう信じて今日も私は前を向いて生きています。